

國學院大學學術情報リポジトリ

受身系動詞「見ゆ」を含む表現：
見られることを忌避した人たちなど

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學国語研究会 公開日: 2025-06-02 キーワード (Ja): 受身系動詞「見ゆ」, 「見えじ」「見えたて まつらじ」, ヲ格を承ける「見ゆ」, 対面の場と「見ゆ」, 慣用句「人に見ゆ」 キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001697

受身系動詞「見ゆ」を含む表現

——見られることを忌避した人たちなど——

中村 幸弘

キーワード…受身系動詞「見ゆ」／「見えじ」「見えたて
まつらじ」／ヲ格を承ける「見ゆ」／対面の
場と「見ゆ」／慣用句「人に見ゆ」

いたように、「見えじ」と「見えたてまつる」とで、そこからは当代の対面の場と文化とが見えてくる。「見えじ」「見えたてまつらじ」が殆どを占めていて、そこには見られることを忌避した人たちが見えてきたのである。

契機1 院友国語研究会の直会のご挨拶

受身系動詞「見ゆ」については、改めてどう説明するか認識しておかなければならないと思った日があった。契機1である。その後、もうその心配もなくなったが、その偉大な先師たちはその「見ゆ」についてどう伝えてくれたのか、遺著で確認した日があった。契機2である。そのうえで、もうお叱りを受けることもなく人生に少し余裕ができた日、『源氏物語』の受身系動詞「見ゆ」からどういうことが見えてくるか、観察を試みた。それは既に確認して

今泉忠義先生は、國學院大學ご定年後、國學院大學院友会館を会場に院友国語研究会を主宰された。そこで、『源氏物語』の巻を追って全講される目標を立てていらつしゃった。ご講義は先生のご急逝という止むなき理由によつて中断されるが、その今泉忠義著『源氏物語 現代語訳一〇〇』（桜楓社・昭和49―一九七四年10月）昭和

50—一九七五—年10月）は既に完成していた。今泉忠義・森昇一・岡崎正継編『源氏物語 本文篇』（桜楓社・昭和49—一九七四—年）の忠実な現代語訳である。

昭和46—一九七一—年四月からであつたらうか、国語学の専任教員は全員出席していた。例外は吉川泰雄先生で、学生部長などの激務に追われていらつしやつたころのことである。田辺正男先生・和田利政先生・金田弘先生、川上蓼先生もいらつしやつた。岡崎正継先を筆頭に栃木の森昇一先生・東京外大の小杉商一先生、助手さんとして中島繁夫先生・長谷川政次先生・荒木雅実先生、大学院ご入学直後の大久保一男先生、その他、海城高校の向山武男先生をはじめとするご高齢の方々もいらつしやつた。今泉先生はもちろん、ご参加の先生方々は、どなたも楽しげでいらつしやつた。殊に、その講読の後の直会は、どなたのお顔もにこやかだった。理解できないこと多い筆者にはそれが苦痛だった。

直会の際、近況を交えたご報告のご挨拶を今泉先生はお求めになることがしばしばだった。そういう該当者がいらつしやらない時には、当日のご講義で取り上げられた音

韻や語彙や語法のいずれかに触れるなどして参加者を楽しませてくださる名手がいらつしやつた。和田先生・小杉先生は、まさにその名手でいらつしやつた。岡崎先生は論理的考察にもつていけるよう構築された話柄にしていつもお話しだった。周囲に発言させることのお得意な中島先生は、司会を買って出られて、筆者もその被害者の一人とさせられた。

ご自身もその豊かな経験者でいらつしやるのに、筆者が公立・私立の高校併せて三校十五年も勤務していたところから「教育現場では、どう取り扱うのがよいのでしょうか。」というお尋ねに決まっていた。世間で学校文法といえは、橋本進吉の橋本文法だった。品詞分類の視点を見ても、それは形態上の特徴によって順次分類していく姿勢である。その日取り立てられた語彙や語法を手短に形態上の特徴で捉えて新知識を頂戴したお礼を申し上げる不器用なご挨拶だった。芸のない筆者は、今泉宴席もそんな程度のことでお許しただいていた。

契機2の、今泉忠義著『源氏物語 語法篇』（桜楓社・昭和59—一九八四—年）にも見るとおり、「見えじ」とあ

れば「見られまい」でも「見せまい」でも通るとおっしゃり、「見えたてまつる」とあれば「お見られ申し上げる」か「お見せ申し上げる」かどちらでも言えてしまう、とおっしゃるご講義である。そこで、その受身系「見ゆ」について、いつか、以下のように捉えてご挨拶に活用しようと思いついていた。

古典語動詞「見ゆ」については、自発系と可能系と、この受身系とから成っていると、漠然と認識されているといつてよいであろう。その現代語「見える」は自発系と可能系とに限られ、受身系を残してはいない。時に、名詞化した「見え（見栄―宛字。「見えを張る」の「見え」―）」から、そういう語義もあったかを感じる程度である。そこで、打消意志の「じ」を伴った「見えじ」を、現代人の意識に惹かれて「見せないようにしよう」と訳してしまっているようである。周辺に自身の内面が認知されてしまうことを忌避する文化がその表現を発生させていたのであろうか。それにしても、「見ゆ」の活用形には偏りが顕著である。文末

終止法の「見ゆ」「見ゆる」「見ゆれ」と出会ったことがない。連用形はその多くが「見えたてまつる」で、なかにはヲ格補充成分を承ける文脈となっている場合もあって、そこからは、当代の微妙な対面の場と文化とが見えてくる。受身系動詞「見ゆ」の主体が客体をカラ格として認識できるか二格として認識できるかで、訳語が「見られる」となるか「見せる」となるかを決定してくれるようである。

そんなご挨拶ができればと思っていたが、その機会はないままとなってしまった。

契機2 改めて今泉忠義遺著と三矢重松遺著とから

今泉忠義遺著『源氏物語 語法篇』（桜楓社・昭和59―一九八四年）は、今泉忠義・森昇一・岡崎正継編『源氏物語 本文篇』（桜楓社・昭和49―一九七四年）の各巻各ページを追って、順次、語法のうえから問題ある語句を抜き出し、注記を施したものである。桐壺から藤裏葉まで中断されているのは、著者がそこで急逝されたからで、

手書きの原稿をオフセット印刷した自筆稿本である。そこには、以下に紹介するように、小稿が受身系動詞「見ゆ」と呼ぶその動詞について、十五か所で立項している。順に符号を付して拾い上げ、末尾に巻名の略称と『本文篇』のページ数とを入れておくこととする。

- (a) いとかうしも見えじと―「見られまい」でも「見せまい」でも、どちらでも通りさう。(桐9)
- (b) 志を見え奉り―「お見られ申しあげ」よりも、ここでは「お見せ申しあげ」の方が当てはまる。(桐14)
- (c) 口惜しくは見えじと―「見せまい」といふよりはやはり、「見られまい」の方が、ここでは当りさう。(帚28)
- (d) 行く先長くと見えんと思はば―源氏が若紫の姫君に、「世に長うありて、思ふ様に見え奉らんと思ふ故ぞ」(賀一五六・四)といふところにも、この意の「見ゆ」が用ゐてある。「見られる」「見せる」の意から大分變つて、「連れ添ふ」といった意味だ。(帚29)
- (e) 見え奉るとも―「お見られ申しあげるとしても」。(帚43)
- (f) 見え奉り給はじ―「お見られ申しあげ」「お見せ申しあ

げ」、どちらでも通りさう。(末131)

(g) いかでか見え奉らん―湖月抄頭注師説に「いかでか我あさからぬ心を見え奉らん、今こそかやうにうらみられ奉れ、もしながらへば、終には其こゝろも見え侍るべけれども、命こそ心にながひがたかるべけれと也」とある。

(滯308)

(h) あはれをも見え聞えて―絵合の巻に「御心づかひして、見え奉らせ給へ」(三四五・七)とあるやうに「見え」には「奉る」のつのが普通なのだが、ここは「聞ゆ」で珍らしい。(少405)

(i) まほならず見え奉り給ふ―几帳越しでお顔をお見せ申しあげなさる。(少415)

(j) 渡りて見え給へ―顔をお見せなさい。(少422)

(k) 人にも見えんが恥かしきに―誰かに見られたりすも恥かしくて。(少423)

(l) え渡り見え奉り給はず―顔をお見せ申しあげることもおできになれない。上に「え」があるから。(常513)

(m) 見え奉らんこそ―お見せ申しあげたりするのは。(常516)

(n) 見え奉り給ひなんや―お顔をお見せ申しあげなさったら

どうだらうか。「なんや」は例の勧誘の表現。(常516)

(o) 見え奉れ―お顔をお見せ申しあげい。(野528)

(p) 見え奉らじ―お見られ申すまい。(野533)

全体が664ページとなるその一冊から右の十五か所を抜き出していたということは、既にこの表現に、一定の関心があったからであろう。そして、暫くして、三矢重松遺著『文法論と国語学』(中文館書店・昭和7―一九三二年)のなかに収められている記事と結びついたのである。同書第七篇(文法論(其四))第二章(動詞の活用)第二節(活段の種類)二(活用の変)の三(自他以外、意識の変化に従ひ変化するもの)―三二三ページ下段―に見る、表現の関係図である。

被

……に 見え 奉る

―サセ 使 (誤)

この第七篇は、昭和六年に安田喜代門が、國學院大學国文科第二十四期生に三矢重松教授の講述された講義内容

を、大分県日田中学校の坂倉道義教諭のノートを借りて整理したものである。そこに見る「見え奉る」の「見え」の右側には、その「見え」が被役、つまり受身であると解説している。左側には「(見)サセ」とあるが、その中間に「(見)セ」があったように思えてきた。その「見セ」は「見え」と微妙に異なるほぼ同意の表現だなどと説明して、しかし、それが「見サセ」となると、これは使役ということになって、誤りかと論じていたように感じとれてきたのである。なお不備あるかに思えるメモ図ではあったが、三矢教授の板書を受けとめたかと思われる記事であった。

さて、その今泉源氏の『語法篇』は、先師が院友国語研究会で『源氏物語』を講述されたことが発端となっている。講読はもっぱら適正な現代語訳をお求めになつての講読で、時に挟まれる思い出も三矢先生のご講義の口調に限られていた。この「見ゆ」についても時々呟かれて、「見る」がはつきり受身の助動詞を付けた「見らる」と「見す」という他動詞の中間にあるのが、この「見ゆ」である、と言われることが多かった。「見す」と、「見る」が使役の助動詞を付けた「見さす」とは違う、ということにもしばしば

触れておられた。「見え奉る」の訳出については、いつも決まって、「お見られ申しあげる」がよいか「お見せ申しあげる」がよいかを繰り返されて、そのうえでどちらかでお訳しになっておられた。それは、三矢重松『高等日本文法』（明治書院・明治41—1908—年発行、昭和9—1934—年第九版）に載る、次の用例の各相の関係図を越えた、実態の認識だった。



右の図は、同書第二篇（詞辭）第七章（動詞の性相）第四節（使役相）の三（可能相と被役相との関係）—同書一九七ページにあるものである。その（2）の用例として引かれていて、他に三例挙げたうえで、「見エム」は「見セムの義」と述べてある。論理を重視して対称図を楽しむ文法学も流行していたことになろう。

一 口癖「いとかうしも見えじ」となって呟かれていたか

かねてから、「見えじ」「見えたてまつらじ」として認識されている。焦点は、もちろん、その打消意志の助動詞「じ」を伴っているという点である。

（1）いとかうしも見えじと思ししづむれど、さらにえ忍びあへさせたまはず。（①桐壺・三四6）

桐壺帝が桐壺更衣を亡くして悲嘆するさまを周辺の者に見られまいとしている、その帝の心内文に見る用例である。見られたくない自身の内面を指示語副詞を用いて連用修飾成分とするこの表現は、作者の口癖のようにも思えてくるのである。「かうしも人に見えじ」（②明石・二七〇8）／「いとかうは見えたてまつらじ」（⑥蜻蛉・二二〇14）／「かうまでは見えたてまつらじ」（②明石・二五六11）／「さしも見えじ」（②賢木・八八10）（④御法・五二二9）など、いずれもこの一群である。語り手・作者の口癖となってい

るかに思える眩きである。

その指示内容を明示して、そこに形容詞・形容動詞の連用形を用いた表現もあるうかと想定されたが、期待ほどに多くはなかった。

(2) わびしと思へるものから、情なくこはごはしうは

見えじと思へり。(1)花宴・三五七(6)

朧月夜の心内文で、朧月夜が源氏から情のこわい女だと見られないようにしよう、見られたくないと思っている、という描写である。「口惜しくは見えじ」(1)帚木・七二三)／ゆゆしう、かく心細げに思ふとは見えじ」(5)総角・三二六(3)も、その一群である。

むしろ、いっそう具体的に「…さま」を用いて、二格・ヲ格補充成分として「見え」と結びついて打消意志の「じ」を添えて姿勢を示すほうが多かったようである。

(3) 源氏「…：。すぎがましきさまには、よに見えたてまつ

らじ。…」(1)帚木・一〇〇(2)

源氏が空蟬に好色めいた振る舞いに見られないようにするつもりだ、と言っているところである。乱暴はしない、胸の思いを伝えただけだという、そういう場面での男の台詞である。「ほけほけしきさまに見えじ」(4)御法・五一四(5)／「あざればみ情なきさまに見えじ」(3)椎本・二一六(3)／係助詞「も」を添えた「心隔てたるさまにも見え

たてまつらじ」(5)宿木・四三三(3)など、みなその一群である。ヲ格補充成分を承ける「をかしきさまを見えたてまつらじ」(3)真木柱・三八六(9)は、あるいは「見ゆ」の語義に少しく違いが生じて、他動詞「見す」に近づいているかもしれない。

(4) …：。御はてをも過ぐさず心浅しと見えたてまつらじ、

と思へば隠れぬ。(6)蜻蛉・二六六(9)

侍従が浮舟は亡くなったと思い込んでいて、その忌みも明けないうちに出仕していて、薄情者と見られないようにしようとしているところである。格助詞「と」で自身の現状を引用して、「見え

られないようにしよう、と表明する表現である。「近かりけりと見えたてまつらじ」(③野分・二八〇14)／「いかでかう思ひけりと見えたてまつらじ」(⑤宿木・四〇八15)／係助詞「も」を添えた「今なんとも見えじ」(⑤宿木四〇一12)／「誰とも見えじ」(⑥蜻蛉・二五〇11)などが、その一群である。

他に、行為を意味する転用系名詞に係助詞「も」を添えて連用修飾成分を承ける「忍びやつれたる歩きも見えじ」(⑤宿木・四九五9)や特定の連用修飾成分を配することのない「さらに見えたてまつらじ」(②葵・七二6)／「見えたてまつらじ」(⑤紅梅・四六11)などがある。

以上が『源氏物語』に見る打消意志の「見えじ」「見えたてまつらじ」で、都合二十二例である。ただ、受身系「見ゆ」をはっきりそれと数え上げることが難しく、概数として五分の一強が、この打消意志の「じ」を伴った「見ゆ」だというように受けとめたいと思っている。高い比率と認識している。

あるいは、筆者が『万葉集』歌に「物思ふと人には見えじなまじひに常に思へりありそかねつる」(万4六1三)

とも「物思ふと人には見えじ下紐の下ゆ恋ふるに月を経にける」(万15三七〇八)ともあるのを知った日から、「物思ふと人には見えじ」を口癖にする人たちがいたかに思えて、それが『源氏物語』作者についても「いとかうしも見えじ」のような指示語副詞を承けていう「見えじ」を口癖にしていたかに思えてきてしまったか、とも思っている。基準を設けて説明することはできないが、とにかく受身系動詞「見ゆ」と共起する打消意志の助動詞「じ」の比率は高い。

× × ×

打消意志の助動詞には「まじ」もあるが、その「まじ」と共起する受身系「見ゆ」は、「わざと見ゆまじう(もてなしたり)」(①空蟬・一二〇4)と「よくけしき見ゆまじき(心づかひしたまへ)」(⑥浮舟・一八六12)とに限られる。また、「じ」が打消推量の意となる用例は、「うしろやすすさし過ぎたることは見えたてまつりたまはじ(と思ひける)」(①末摘花・二八二8)に限られる。

二 仮定条件句「…見えたてまつらむこそ」の述部
は、ほぼ決まって「恥づかしけれ」だった

受身系動詞「見ゆ」は、対面の場の主体・客体を意識して用いられる。その受身系「見ゆ」が助動詞「む」を下接させて係助詞「は」「も」「こそ」などの上にあるとき、ある種の仮定条件句を構成していることになるようである。一般にそのような「む」の機能を仮定・婉曲と読んで取り扱っている。この物語の「…むは」「…むも」「…むこそ」という仮定条件句に注目していると、それを承ける述部は、多くが「恥づかし」という情意形容詞を含んでいたのである。

さて、その「恥づかし」は、自身を恥じていう体裁が悪いとか気が引けるとかいう意だけでなく、そう感じた結果、他者が立派だと感じていう場合もあって読解に悩まされるが、この「…むは」「…むも」「…むこそ」の述部は、自身を責める恥づかしいであった。当代人の対面についての共通した反応だったと考えてくる。

(5) …、子ながら、恥づかしくおはする御さまに、見えたてまつらむこそ恥づかしけれ、…と思ひ返したまふものから、…。(2)常夏・二四五六

内大臣が近江君を自分の落胤おとしだぬと承知のうえで、その近江君を弘徽殿女御に引き合わせている場面である。「恥づかしくおはする」、つまり、自身の気が引けるくらい立派でいらつしやる弘徽殿女御から卑しい育ちの近江君が見られ申しあげたりするようなことがあったとしたら、弘徽殿女御にお目にかけたりするようなことがあったとしたら、私には「恥づかしけれ」と、内大臣が思っているところである。話題の一文例としてしばしば引いてきたこの一文が、本章の代表用例でもあったのである。

(6) 式部丞「…無才むざいの人、なまわるならむふるまひなど見えむには、恥づかしくなむ見えはべりし。…」(1) 帚木・八六八

学問のない自分のような者がみっともない振る舞いなど

を見られてもしたら、顔向けもできないという思いでした、と語っているところである。

(7) よその思ひやりはいつくしく、もの馴なれて見えたてまつらむも恥はづかしく推おしはかられたまふに、…。

(4) 若葉下・二二五10)

柏木が小侍従の手引きで女三宮に近づく場面である。六条院ともいわれる源氏の正室としての女三宮には威厳があつて、馴なれなれしく見られ申しあげたりするようなことは、お目にかかったりするようなことも、自分には気が引けることだとその方は推測されなさるので、というところである。

(8) 宮は、御心の鬼に、見えたてまつらんも恥はづかしうつつましく思ふに、ものなど聞こえたまふ御答いへも聞こえたまはねば、…。(4) 若葉下・二四六6)

ここは、その女三宮が良心の呵責から源氏には対面する

のも恥はづかしいと思つてゐる場面である。源氏から見られ申しあげることも、源氏にお目にかかることも、女三宮には気が引けて遠慮されることだと思ひになつて、源氏が彼女に何かお話し申しあげなさつても、彼女のほうからお答えをお申しあげになることもおできにならない、と述べているところである。

(9) つとめてはさすがに人のゆるさぬことなれば、変かはりたらむさま見えんもいと恥はづかしく、髪かみの裾すそのはかにおぼとれたるやうに、しどけなくさへ削そがれたるを、むつかしきことども言はでつくろはん人もがなと、…。(6) 手習・三四〇11)

浮舟にとつては宿願の出家だったが、周囲が賛成し、容認したわけではない。周囲の人たちから変わってしまった尼姿を見られてもしたりしたような場合も、「恥はづかしく」と描写してあるところである。人に見られたくない、と浮舟が思つてゐるところである。「変かはりたらむ・さま見えんも」は、その仮定・婉曲の「む」が重なつていて、あの『枕草

子』の「思はむ子を法師になしたらむこそ、心苦しけれ。」
(枕・五)を思わせる。

以上の用例に同じく、「…むは」「…むも」「…むこそ」の述部に「恥づかし」が現れる用例として、「見えむは」(①帚木・八三六)／「見えたてまつりたまはむも」(④若菜上・一二二四)／「見えたまはむも」(⑥蜻蛉・二二八六)／「見えんこそ」(⑥手習・三〇七二)などが検出できる。準ずる用例として、「見えたまひけむこそ」(④夕霧・四二〇二)／「見えたてまつらむことも」(⑤総角・二五六一〇)も加えてよいであろう。

さて、文構造を変えても、その仮定・婉曲の「む」を添えた受身系「見ゆ」は、同じく「恥づかし」で、その場面の情意を述べていた。受身系の「見えむ」は、殆どが「恥づかし」という情意が連動するのである。

(10) 世の人に似ずものづつみをしたまひて、人にもの思
ふけしき気色を見えんを恥づかしきものにしたまひて、

…。(①夕顔・一八六七)

夕顔は、惟光の手引きで源氏が交際することになった女性である。踏みとどろかす唐臼の音も枕上かと思えるような下層社会での暮らしであるが、その彼女もまた、他人から物思う内面を見られでもしたりするような場合には、きまり悪いと思う一人であった。「人にもの思ふ気色を見えんを」というヲ格補充成分を受けてきまり悪い意の「恥づかし」という情意判断を常にしていたのが、彼女である。

ここは、雨夜の品定めで頭中将が語る「つらきをも思ひ知りけりと見えむはわりなく苦しきものと思ひたりしかば」(①帚木・八三六)を受けている。そこにも「見えむは」とあって、そのように自身の内面を見られたら「わりなく苦し」と表現されているが、その「わりなく苦し」は、続く(10)(①夕顔・一八六七)では「恥づかし」と表現されていた、と見ることができるのである。

(11) うち腫れたるまみも、人に見えんが恥づかしきに、
宮、はた召しまつはすべかめれば、…。(③少女・

五八七)

雲居雁が夕霧との仲を裂かれ、内大臣邸に連れ去られて後、夕霧が、その泣き腫らした顔を周囲の人たちに見られないようにしよう、見られたくないと思っているところである。ここでもまた、見られたりするような、そういうことが「恥づかし」いうえに、という心理描写のところである。この少年・夕霧にも、自身の内面を見られないようにしようという、対面の振る舞い方というか、対面の文化があったのである。

ここで見てきた「::むは」「::むも」「::むこそ」などの仮定・婉曲の「む」は、準体法の連体形と判断される。その「む」を準体法の連体形にしないで、形式名詞「こと」を下接させた用例(⑤総角・二五六12)やその仮定・婉曲の「む」を用いることなく「見えたてまつる」をそのまま準体法の連体形として用いた用例(⑥浮舟・一三九8)もあって、それらも、述部には「恥づかし」やそれに類する形容詞で情意が述べられていた。

三 「見つけられたてまつらじ」の「見つけられ」は、 受身系動詞「見え」でも表現されていた

(12) 見つけられたてまつらじ、しばし、御はてをも過ぐ
さず心浅しと見え^{見え}たてまつらじ、と思へば隠れぬ。

(⑥蜻蛉・二六六6)

薫が女房たちの前を通るので、その一人の侍従という女房ははらはらしている。彼女は浮舟に仕えていたが、その浮舟は亡くなったものと思っていて、その忌みを明けないうちに、また出仕していたので、薫に見つけられでもしたら具合が悪いからである。薄情者よと薫から見られないようにしよう、と思って隠れてしまった、というのである。そこでは、一旦、「見つけられたてまつらじ」と心内で呟き、いま一度、「御はてをも過ぐさず心浅しと見え^{見え}たてまつらじ」と言い換えていて、前文「見つけられたてまつらじ」と同一内容と見てよいであろう。したがって、この「見え^{見え}たてまつらじ」の「見え」は、「見つけられ」と見てよいことになる。隠そうとしていた事柄を他者から見つけださ

れる、露顯されることをいう「見つけられ」の意を、この「見え」は担っているといえる。受身系動詞「見ゆ」は、そういう意味まで担えたのである。

次例は受身系動詞「見ゆ」の禁止表現である。ただ、単に「見られるなよ」ではない。それでは不十分で、「見つけられるなよ」と読みとられなければならない。

(13) ∴、^{句宮}「いみじくかしづかるめる客人の主、さてな

^{見えそや}」と戒めたまふ。(6)浮舟・一五三13)

句宮が、隠れ家で浮舟と耽溺の二日を過ごした、その折のことである。時方という乳母子が御手水やお菓子を取り次いだりしているのを見て、句宮が「たいそう大事にされているらしいお客入よ、そうしているところを世間の人に見つけられるなよ」と注意しているところである。「客人の主」は、時方をからかつてそう言っているのである。この「見え」も、「見つけられ」の意である。

いま一例、その「見つけられ」の意の「見え」が存在した。これも、浮舟巻である。

(14) 例の隨身召して、御手づから人間に召し寄せたり。∴、^薫「人に見え」でをまかれ。∴」とのたまふ。(6)浮舟・一七六8)

薫は隨身の探索でいろいろな秘密を知ることになった。

句宮の裏切りにも気づく。気になるので手紙を遣って事情を知ろうとする。そこで、「誰にも見つけられないように行っておくれ」と言っているのである。その「を」は強意の間投助詞である。そういうわけで、これも、「見つけられ」の意の「見え」である。隠そうとしていた事象が暴かれようとした場面で用いられる、「見つけられ」に相当する「見え」である。

三矢重松は、『高等日本文法』（前出）第二篇（詞辞）第七章（動詞の性相）第二節（被役相）において非情の受身を取り立てるに際して「他より動作を被る場合、特に迷惑する場合に用うるを最も普通なる方法とす」といって、いわゆる迷惑の受身を認識させてくれた。それを受けていうと、ここに見てきた受身は、いっその度合いの濃い被害の受身である。

四 ヲ格補充成分を承ける受身系動詞「見ゆ」

受身系動詞「見ゆ」は、現在その相当量が「見せる」と現代語訳されている。その現代語「見せる」は他動詞である。古典語の「見ゆ」は自動詞である。そこをどう理解したらよいか、長く悩みつづけている。現に古典語の段階で受身系「見ゆ」そのものが他動詞化していたのか、それとも、現代語のその文脈には他動詞「見せる」を用いるよりほかなくなっているのか、そこが見えてこないのである。

本章は、さしあたって、そこに格助詞「を」を表出して受身系「見ゆ」に掛かっていく文の成分に注目して、ヲ格補充成分と呼んで整理していきたい。西欧語の文法にいう目的語にほぼ相当する文の成分とそれを承ける受身系「見ゆ」との関係確認である。

- (15) …幼心地^{おとなじこ}にも、はかなき花紅葉^{もみぢ}につけても心ざし^{こころざし}を見えたてまつる。(①桐壺・四四6)

幼い源氏が義母・藤壺に早くも惹かれて、みずからの好

意を示しているのである。そのように「心ざしを」を承ける受身系「見ゆ」として、(③少女・三三三)／(④若菜上・九六11)／(④夕霧・三九五10)が挙げられる。

- (16) 薫「…、恨めしくもいぶせくも、思ひきこゆる気色^{けしき}をだに見えたてまつらぬこそ、我ながら限りなくかたくなしきわざなれ。…」(⑤総角・二三19)

薫が弁尼に語っている会話文のなかの用例で、恨めしくも遣る瀬なくも所思い申しあげているそぶりさえもお見せしていないと、大君に対する思いを述べている。以下、「後れたる筋の心をも」(①帚木・七二3)／「もの思ふ気色^{けしき}を」(①夕顔・一八六7)／「情を」(②滯標・二八四14)／「あはれを」(③少女・二〇4)／「情を」(④夕霧・四二10)／「さやうなる心を」(④幻・五二三5)／「かかる気色^{けしき}をも」(⑤宿木・三八四14)などが、この一群として挙げられる。

- (17) …、いとうたてもあるかなとおぼえて、をかしさ

まをも見えたてまつらじ、…と思ふに、…。(3)真木
柱・三八六9)

冷泉帝の御渡りに困惑した玉鬘の心内文で、愛想よいそ
ぶりをお見せしないようにしようと思っているところであ
る。その「さま」「ありさま」に格助詞「を」を付けたヲ
格補充成分は多く、「後れたる筋の心をも」(1)帚木・
七二三)／「をかしきさまを」(同・一〇九四)／人げな
きありさまを」(同・一一〇五)／「すきずきしきさまを」
(1)若紫・二三七10)／「心寄せあるさまをも」(4)若菜下・
一九四7)／「をこがましきさまを」(4)夕霧・四一一8)
／「見たてまつり知らせたまふさまをも」(5)早蕨・
三六八13)／「言ふかひなきさまを」(6)手習・三六〇6)
などが、その一群である。

既に用例(3)において、形式名詞に近い「さま」が連
体修飾語を冠して二格補充成分となっている「…さまに」
の存在について確認してきている。その一群と右の一群と
を併せ見たとき、その「…さまに」をヲ格補充成分に転換
させて、本来の受身系動詞「見ゆ」と、受身系の意識を残

しながら、他者に向けて働きかける他動詞の機能を担わせ
ることになったか、とも見えてくるのである。その一般の
訳出に見る「見せる」は、「見られるように見せる」であつ
て、見てもらえるように努めている見られる主体が、いつ
か見せる主体になっていた、とも見えてくるのである。

× × ×

ここで、他動詞「見す」「見せたてまつる」との間にど
のような相異が認められるか、殊にその行為の対象として
のヲ格補充成分に相当する文の成分の比較が期待された。
語彙索引を見て、その用例数が多くなく、絵など具象物に
ついては多動性の明確な「見す」「見せたてまつる」を用
いたかと思える程度でしかなかった。また、青表紙系本文
と河内本系本文との間にその推移が辿れないかと、吉澤義
則『対校源氏物語新釈』(平凡社・昭和二十七—一九五二
—年)に拠って追跡を試みたが、その該当箇所は「斯かる
気色をも見え奉らむと、忍び返しつゝ、…」(5)宿木・
二二七12)の一例に限られた。

五 対面交流の場と登場人物の相互関係が見えてくる受身系動詞「見ゆ」とを含む表現

広く婚姻関係にある男女が同室するなどした場合、そのすべてを受身系動詞「見ゆ」で表現している。契りを結ぶ前であろうとその後であろうと、当代としても許されない関係であろうとどうであろうと、正妻であろうとなかろうと、物越しであろうとなかろうと、あらゆる男女の出会いを、この受身系動詞「見ゆ」で表現することができた。

その一方で、その受身系動詞「見ゆ」は、その出会った人々が単なる周囲の人たちであって、漠然としている場合も多い。いわゆる女房たちが客体となる場合である。時には、路上の行きずりの人のこともある。そうかと思うと、薫と匂宮など、知友の関係の対面交流も、この動詞「見ゆ」で表現された。雲居雁と内大臣とや夕霧と源氏などと、親子の対面もまた、この動詞「見ゆ」で表現されていた。

× × ×

雨夜の品定めにおいて、話題となっている女性たちは、その彼氏との出会いが、みなこの動詞「見ゆ」を用いて表現されている。指食いの女の左馬頭との対面は(1)帚木・七二・三・七)の受身系「見ゆ」であり、内気な女の頭中将との対面は、(同・八三・六・一〇)に見る、この受身系「見ゆ」である。特定されない一般的な男女の出会いについていう、その表現も、(同・七三・三)の、この受身系「見ゆ」である。続いて、浮気な女と男との対面となるが、その(同・七七・七)も、同じくこの受身系「見ゆ」である。

用例(3)として見てきている(1)帚木・一〇〇・2)の「見ゆ」を含む「すぎずきしきさまには、よに見えたてまつらじ」は「乱暴はしないよ、好きだと言いたいだけなんだ」と読みとれて、その「見ゆ」は、肉體関係をいうとも見えてくる。源氏が主体で空蟬が客体となるのはこの一例で、以下、(1)帚木・一〇一・12)に始まって(同・一〇九・6)／(同・一一〇・5)まですべて、空蟬が主体で源氏が客体となる空蟬の心内文に見る用例である。

(18) …、人違へ^{ひとが}とたどりて 見えんもをこがましく、あ

やしと思ふべし、本意ほんいの人と尋ね寄らむも、かばかり逃のがる心あめれば、かひなうをこにこそ思はめと思す。(1)空蟬・一二五6)

もちろん、源氏は、空蟬の寝所に忍び入ろうとしたのである。なんと、誤って、空蟬の夫・伊予介の十歳の娘・軒端萩と契ってしまったのである。「人違へとたどりて見えん」は「たどる」があれこれ考えて勘づく意で、人違いをしたと勘づいて見られるようなのも愚かしいことで、と思っているところである。次の夕顔巻で、源氏はその空蟬を思い出して、「うつせみの」歌を贈りなどして、いわゆる男女の関係ではなく、「さすがに言ふかひなからずは見えたてまつりてやみなん」(1)夕顔・二九〇12)と思うのだった。その「見ゆ」は、お便りを交わす程度の「見ゆ」である。さて、もう一人の軒端萩はその後、藏人少将と結婚するが、「あやしや、いかに思ふらんと、少将の心の中うちもいとはしく、」(1)夕顔・一九〇13)とあって、変だなと思つて処女でなかったことを知ることになる。(18)の「見ゆ」も、源氏が直ちにその段階に至ってしまったことをいう

「見ゆ」だったのである。

× × ×

主人公・源氏は、十二歳で四歳年長の葵上と結婚した。彼女も恥ずかしく似げなく思っていたし、源氏も馴染みにくく思っていた。この二人のどちらも、受身系動詞「見ゆ」の主体となつて表現されることはなかった。

(19) 源氏「何か、浅う思ひたまへむことゆゑ、かうすきずきしきさまを見えたてまつらむ。」(1)若紫・二二七10)

十八歳の源氏は、北山で雀の子が逃げたと泣く十歳ほどの女君を垣間見る。反語で「すきずきしきさまを見えたてまつる」を否定して女君に近づこうとしているところである。同趣の表現は用例(3)でも見えてきていて、源氏は後にも、空蟬にもそう言っていたのである。

(20)

中納言「…、かく御男^{おごう}などをまうけたてまつりたまひ

ては、あるべかしうしめやかにてこそ、見えたてま

つらせたまはめ。…」(①紅葉賀・三三二―13)

女君の乳母・少納言は、人形遊びしている女君に注意している。十歳の彼女だが、もうお婿さんは源氏と決まった関係にある。奥方らしく落ち着いて振る舞うよう勧めている。「落ち着いていると見られるように振る舞いなさいませ」という、勧誘の表現である。紫上が主体となり源氏が客体となる受身系「見ゆ」はこの一例に限られ、他は源氏が主体となり紫上が客体となる用例ばかりで、(①紅葉賀・三三三11)／(②葵・七二4)／(同・七五9)／(②濡標・二九三6)などがそれである。紫上亡き後、その過往を思い出している場面にも、「などで、たはぶれにても、…さやうなる心を見えたてまつりけん、…」(④幻・五二三5)の一例が見られて、それも、源氏が主体で紫上が客体となる受身系「見ゆ」であった。ただ、それまでの客体はカラ格で、紫上から源氏が見られる関係にあったが、最後のこの一例は、紫上に源氏が見せるといふ関係で、客

体の紫上は二格ということになるうか。後悔の思いである。

明石君は、明石君となる以前の明石入道娘の段階に三度その受身系「見ゆ」で描かれる。(②明石・二五六11)／(同・二六一2)／(同・二七〇8)で、いずれも、明石入道娘が主体で源氏が客体となる受身系「見ゆ」だったが、(②濡標・三一〇11)では源氏が主体となり六条御息所が客体となる受身系「見ゆ」だった。朝顔姫君も、(②朝顔・四八七4)では朝顔姫君が主体となり源氏が客体となる受身系「見ゆ」だったが、(③少女・二〇4)では源氏が主体となり朝顔姫君が客体となる受身系「見ゆ」だった。これらの客体は、おもむねカラ格として読めるようである。

用例(15)に引いた、幼い源氏が藤壺に「心ざしを見えたてまつ」(①桐壺・四四6)つたのは、主体が源氏で藤壺が客体となるが、その客体は、上記のとおり二格である。したがって、この「見ゆ」は、他動詞化しているということになるう。

朱雀院の第三皇女・女三宮は、父院の愛情が深く、結局、源氏に彼女の未来が託された。源氏とその女三宮とは、どうであつたろうか。(④若菜下・二四六6)／(④横笛・

三四八11) / (④ 鈴虫・三八〇14) のいずれもが、女三宮が主体となり源氏が客体となる受身系「見ゆ」の表現で、その客体の源氏はカラ格として読める関係にあるといつてよいのであろう。

× × ×

用例(1)として引いてきている、あの「いとかうしも見えじと」(① 桐壺・三四6)の「見え(じ)」の客体は周辺の人々ということ、これも既に見てきているところである。ただ、この場合の周辺の人々は、廷臣としても高位の侍臣を始め、亡くなった桐壺更衣以外の女御・更衣、さらには、いわゆる女房と呼ばれる人たちまで含んで指すことになるのか。このように大勢の人たちがそれとなく感じられるのは、ここに限られるので、あるいは、もっと絞らなければならぬかとも思っている。桐壺帝の帝を、現代の天皇のように思ってしまったところからの誤解かとも思っている。

これも、用例(6)として式部丞の発言のなかに見る「無

才の人、なまわろならむふるまひなど見えむは、恥づかしくなむ見えはべりし」(① 帚木・八六8)での客体もまた周辺の人々であるが、この場合は極めて限られた僅かな人たちのように感じられてくる。「無才の人」に相応する交際範囲が見えてくるからである。

(21) ∴、いかでひきすぐれて面だたしきほどにしなして

も見えにしがなと、明け暮れ、この母君は思ひあつかひける。(⑥ 東屋・一八3)

浮舟が世間の人から見て他家の娘以上に面目の立つ縁組みをさせてやりたいと、母・中将君は思っている。浮舟が世間の人からそう見られるようでありたいと思って、母・中将君は彼女の世話をしているのである。暫く読み進めると現れる「∴、うちあはぬさまに見えたてまつることもやと」(① 東屋・二二9)も、同じく母・中将君の心内文に見る用例で、浮舟が世間の人から行き届かないというように見られることがありはしないかと心配しているところである。この「見えたてまつる」について「お見せ申しあげ

る」としか現代語訳できないとする向きもあるが、この客体はカラ格でも受けとめられる。世間からそう見られはしないかと不安がっているのである。浮舟がそう見せようとしているのではない。ただ、現代語では「見られ[×]申しあげる」というように受身の助動詞の下に謙譲の補助動詞を付けることに抵抗を覚えるところから、「お見せ申しあげる」と訳してしまうように思えてくる。

(22) ∴、いよいよせきとめがたくて、ゆゆしう、かく心細げに思ふとは見えじとつつみたまへど、声も惜しまれず。(5総角・三二六3)

大君の臨終場面での、薫の心内文に見る用例で、薫が周囲の人々から忌まわしく心細い思いをしているように見られないようにしようと思っているところである。この薫は、そういう気兼ねをししばりする人物で、(5総角・三三八9)でも(6蜻蛉・二五〇11)でも、同趣の關係で、その受身系動詞「見ゆ」を用いて描いている。薫の性情が見えてこよう。

まだまだ、多様な登場人物相互の關係と関わって、この受身系動詞「見ゆ」は用いられている。腹の内を探り合う友人關係に見る用例、女主人とそこに仕える女房たちとの間に見る用例、そして、何より興味があるのは、微妙な關係にある男女の間で、この「見ゆ」を含む表現がどう活躍しているかである。

そこには、「人に見ゆ」という慣用句が成立していて、この一連の表現の背景にあった。

(23) ∴、源氏「世の中のいとうくおほゆるほど過ぐしてなむ。人にも見えたてまつるべき」とのみ答へたまひつつ過ぐしたまふ。(2葵・七五9)

紫上との新枕後の感慨を述べている眩きで、葵上の死による打撃から立ち直れないので、この当座を過ごしてから、この私が貴方^{あなた}から見られ申しあげるようにしよう、見ていただくようにしよう、お目にかかるようにしよう、と言っているところである。この「人」は紫上であるが、その背景には慣用句「人に見ゆ」があったといつてよい。その

「人に見ゆ」は、(2) 明石・二七〇八) / (10) (3) 少女・五八七) / (4) 若菜上・三四六) / (4) 若菜下・二五二七) / (4) 夕霧・四二〇二) / (6) 浮舟・一五五10) / (6) 手習・三〇七12) などに見られて、慣用句「人に見ゆ」と見えてくる。それに準じてか、「人々に見えたてまつらむことも」(5) 総角・二五六10) / 「恥づかしげならむ人に見えむことは」(同・二八一三) / 「この人に見えたてまつらむを」(6) 浮舟・一四二10) などともいつていたのである。

ここに至っても、明確になりえていないのは、第四章に述べたヲ格補充成分を承ける受身系動詞「見ゆ」を含む表現のすべての「見ゆ」が他動詞化しているわけではない、という点である。そこに登場してきた客体が、なおカラ格で読みとれるか、もはやニ格としてしか読めないかの別である。その視点については、適宜本第五章のなかに折り込んで、機会を見て触れてきた。各用例にその視点を適用して、カラ格かニ格か、読み分けていくことでいかがであろう。

受身系動詞「見ゆ」の全貌整理を期待する

受身系動詞「見ゆ」の上代の用例を、筆者は極めて単純に『万葉集』を通読して出会って、その存在を認識していたように思う。「物思ふと人に見えじとなまじひに常に思へりありそかねつる」(4六・一三)と「物思ふと人に見えじと下紐の下に恋ふるに月そ経にける」(15・三七〇八)とである。新全集本は、ともに「見せまい」と現代語訳している。それはともかく、この二用例について、あの『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂・昭和42—一九六七—年刊)は、「見ゆ」にこの用例の用法を受けとめていなかった。この事実は、上代語としての受身系動詞「見ゆ」の認識の低さを物語っていると見てよいであろう。

動詞「見ゆ」に受身系があるなどという認識ではなく、「見えじ」で一つの姿勢を示す語句として相応に認識され、採用されていったように感じられる。その一方で、中古和文の客体尊敬の補助動詞「たてまつる」にその「見え」が定着して対面の場の表現としてその雰囲気をも含めて広まりを見せたように見える。

時代下って、中世の『平家物語』などにもその用例を見るが、いわゆる擬古物語に用例を見るのであろうか。表現の難解さが用例を減じていったのであろうか。対面の場についてのその種の意識が見られなくなって用例を減じることになったのであろうか。

そこで、身近な辞典を見たとき、その現状は以下のとおりである。例えば小学館『古語大辞典』（昭和58—一九八三年／中田祝夫・和田利政・北原保雄編）でも、この受身系動詞「見ゆ」の全体像は残念ながら見えてこない。続いて、『角川古語大辞典 第五卷』（平成11—一九九九年／中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編）を見ても、その点に変わりはない。その点、小学館『日本国語大辞典 第二版12』（平成13—二〇〇一年／日本国語大辞典第二版編集委員会）は、全10ブランチのうち、②・③・④の3ブランチが受身系「見ゆ」の語義と用例とになっていて、その出典からも、語義と時代の流れとが少しく見えてくる。もちろん、その見出しは、現代語「み・える」である。殊に中世以降、どのような作品に、どのような用例を見せるかが幾らか確かめられる。受身系動詞「見ゆ」の